

通州に至る延長一五哩三の支線で、毎日三回の旅客列車の便があり、汽車行程約五十分、賃金一等九〇仙、二等五五仙である。但しこの區間列車は豐臺を起點とし永定門及び通州街道の二車站を経て、一旦正陽門車站に入り、更に通州街道車站に引返して通州に向ふのを例とするけれど、北京よりの旅客は正陽門、若くは通州街道より乗車するのが便利である。

通州(トウシ) 通州と北京朝陽門の間は、坦々

砥の如き良道(三十尺幅の鋪石道)が通じてゐて、一方又大運河の水運を擁し、白河を介して天津にも通航の便がある。昔の通州は中部支那方面の貢糧中樞所として、北京の咽喉を扼する要衝であつたのであるが、鐵道開通の結果はその地位を失つたのと、北清事變の際兵燹にかゝつて、今なほ舊態に復しない。通州は今回事變に際して、後で述

六六

べるやうないはゆる通州事件の起つたところで、何人も忘れ得ない恨み多い土地となつた。一城市は明代の初の創建にかゝり、更に清朝に至つて増築したのであるが、城垣も今は廢墟として、滿目荒廢たるものがある。城垣には通運、朝天、迎薰、凝翠の四門があつて、流石に各門に通ずる十字街頭に立つてゐる鼓樓の殘影には今尙往時の繁榮を語るものがある。八里橋は通州の東北約三哩の地點に在る石橋で、幅約四十八尺長百九十尺「長橋映月」の勝を以て聞えてゐる、通州八景の一つである。

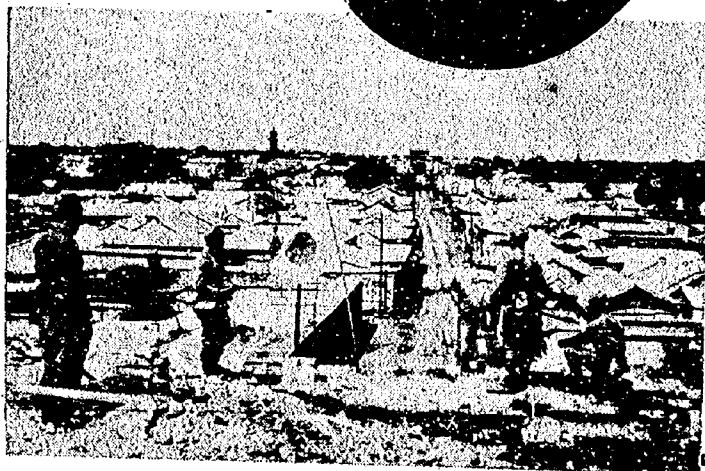
「通州事件」 昭和十二年七月二十九日午前三時、冀東防共自治政府所在地通州に、未だかつてなき邦人大虐殺事件が起きたことは誰もが知る通りである。

事件といふのはかうである。長官殷汝耕の直接部下で、彼の最も信頼してゐた保安隊教導總隊が

0753



寫眞上は温泉郷湯
山。圓内は立ち昇
る湯氣。
下は通州を警備す
る我が勇士。



六七

0754-20754



寫眞上は温泉郷湯
山。圓内は立ち昇
る湯氣。
下は通州を警備す
る我が勇士。



六七

0754-20754

支那軍戦勝のデマを盲信して、二十九軍の敗残兵と共に、約三千名の兵力を以つて突如兵變を起したのである。

當時同地守備の任に當つてゐた我軍は、僅かに約百名の兵力であつたが、よくこれに應戦、急を知つた飛行隊ならびに營島部隊の救援によつて三十日には敵兵を掃蕩して、市内の治安回復は完了されたのであつた。

しかしこの叛亂事件によつて、同地特務機關は細木機關長を初め、關員は全滅し、守備隊にも戦死十八名、負傷者十九名の損害を蒙つたのである。しかも暴亂なる支那兵は攻撃の目標を主として非戦闘員たる我居留民に置き、冒諍に絶する暴徒を加へ、その大部分を城門外に拉致して慘殺するなど我が居留民約三百八十名中死を免れ得たものは僅かに百二十餘名、しかもその虐殺の前後における兇害にも勝る慘虐なる行爲は、眞に耳目を驚か

しめるものがあり、我國民を悲憤せしめたのである。

〔悲慘を極めた特務機關〕一度、通州特務機關と鮮かに書かれた門をくぐると、凄惨な籠城のあとに思はず身震ひさせられた。門の入口の部屋にゐた数名の機關員は銃聲と共に甲斐少佐の命によつて應接室に駆けつけやうとしたが、庭に出るや否や機關銃の亂射にバタ／＼と撃ち死され、屍體は石油で焼かれたとのことである。更に甲斐少佐の居室に入れば少佐が軍刀と拳銃を兩手に持ち鉢巻姿のまま、壯烈な戦死を遂げてゐた。

應接室にはどす黒い血痕が飛び散り部屋は根こそぎかきまはされ鬼氣人に迫るものがあつた。その隣の事務室には黒板に書かれた「二十九日午前三時半襲撃さる」の文字も一入悲壯なものを感ぜさせた。

當時特務機關には四十挺餘の拳銃、小銃があつ

たのだが、これを全部取り出すひまもない程突如との間に襲撃されたが、副員は沈痛よく五千發の銃弾を撃ち盡くしてゐたところを見れば、全く矢盡き刀折れての壯烈な最期であつたのである。

尙通州慘劇の中でも最も悲惨を極めたのは旅館近水樓だつた。

主人夫妻女中六名、それに宿泊客を合せて十餘名が或は現場で、或は銃殺場に拉致されて慘殺されてゐた。こゝは女の被害者が多かつただけに、玄關や廊下を距てた三疊の間等には血痕のベツトリついた體が散亂して、一入凄惨な氣を與へた。しかし同地も七月廿日、警備部隊の到着によつて、治安は全く舊に復したのである。こゝで京綏鐵路によつて、觀光の適地を説明しよう。(尙京綏鐵路及び同線の戦蹟は蒙疆地区の項参照)

【清河鎮(チン・ホオ・チオン)】
戸數約百の小さい

町ではあるが、一條の溪流に沿つてゐる。これは清河と稱せられて、萬壽山の西方玉泉山の清泉を水源としてゐるのである。これに架せられた石橋は、明の永樂年間、この地が十三陵の通路に當るところから、特に架設されたもので、建築の壯麗今なほ人目を驚かすに足るものがある。

【沙河鎮(シャ・ホオ・チオン)】
こゝは戸數約二百、安濟、朝宗の二橋がある。市街はこの二橋の中間にあるのである。この地には明代の行在所があり、古來十三陵に行幸する毎に、こゝに駐蹕せられたといふ。西紀一五四〇年の重修にかゝる行宮は、四方約十町の周圍に四門を穿つた豪華城の中央にあつたが、今は、僅にその舊址を存するのみである。

【南口(ナン・カオ)】
この地は、八達嶺山脈の南麓に位して、

0756